

ふくやま文学館友の会だより

2022年（令和4年）12月20日発行

〒720-0061

広島県福山市丸之内1-9-9

ふくやま文学館友の会事務局

TEL (084) 932-7010

FAX (084) 932-7020

第22号



「志賀直哉・木山捷平の探訪」に参加して 奥山清美

ふくやま文学館友の会発足二十周年記念研修旅行は、二〇二二年五月三十一日に実施された。

友の会結成は、二〇〇〇年十二月三日なので、二十年目は二〇二〇年に実施される予定であった。

岡崎会長は記念に相応しい研修を二泊二日「横浜・鎌倉」方面を企画されていた。ところがコロナウイルスの拡大により延期を余儀なくされ、結局、五月三十一日「城崎・出石」に二十名で出発した。

今回は、トイレ付き豪華バスで文学館を七時三十分に出発した。車中では会長の説明を聞きながら播但道に入った。途中、道の駅で特産の山椒入り食材の購入などで楽しみ、目的地の城崎に着いた。昼食は「おけしよ 鮮魚食事海中苑」で、海老、蟹、ウニ、魚、サーモンなど盛られた海鮮丼の日本の幸をいただいた。



城崎温泉は、志賀直哉が事故後の養生に湯治生活を送り、短編小説「城崎にて」を発表した地である。十一回も訪れている。食事後、城崎文芸館を見学した。常設展では、志賀直哉や彼と共に近代文学を担った白樺派の作家たちと城崎の町や人との関わり方を紹介した興味ある展示であった。

一階のショップがユニークで城崎ゆかりの書き手にまつわる本など、城崎温泉で本を片手にゆったりとした時間を愉しめる商品が並んでいた。館内には訪れた人の詠んだ短歌・俳句も展示されていた。

日本海ぎゅっと詰まった松葉かに 清美

（城崎は松葉蟹が美味しいですね。）

次に笠岡出身の小説家、木山捷平の郷愁の地で

ある出石を訪れた。古い町並みが残る但馬の小京都。捷平にとって出石は大学卒業後、最初に赴任し教職時代を過ごし、小説「出石」を発表した地である。観光ガイドさんの説明を聞きながら近畿最古の芝居小屋「出石永楽館」に入った。舞台は床が丸く切り抜かれ、下には奈落があり、降りると廻り舞台装置があった。貴重な劇場機構が残され、華やかかなりし明治の往時を見る事が出来た。永楽館を後に、日本最古の時計台「辰鼓楼」を眺め、出石を後にした。

帰路、和田山の道の駅、但馬の「海鮮せんべい但馬」に寄った。

この度の旅行で、志賀直哉の「城崎にて」から、電車に跳ねられ偶然にも助かった「自分」と、虐められた鼠、いもり、蜂などの死を重ねて「生と死」を今の世の中で改めて考えることとなった。



ふくやま文学館友の会創立二十周年記念誌に寄せて

図書館メイトひろしま会長 高田幸子

霖雨どきのお見舞いを申しあげます。

このたびは、ふくやま文学館友の会創立二十周年をお迎えになり、誠におめでとございます。また、ご丁寧にも創立二十周年記念誌をご惠贈賜り、ありがとうございます。

早速拝読いたしました。が、「ふくやま文学館友の会だより」の内容の多彩さに加え、執筆者の多いことから会員の皆様の文学に対する熱意の深さを感じました。そして、「文学探訪」では地元は勿論のこと関西方面から九州、四国と見学範囲の広いことと参加者数の多さから会員の皆様の活動に対する前向きな姿勢が伺えました。

この記念誌は貴会が歩んで来られた二十年の道のりと企画された方々のご苦労の結晶とも思える貴重な記録です。長く手元に置き私ども「図書館メイトひろしま」の活動の参考にしたと思います。

最後にになりましたが、貴会の益々のご発展をお祈り申しあげます。

福山大学教授 青木美保

ふくやま文学館友の会創立二十周年、誠におめでとうございます。

そして、その節目にあたって、記念誌「山椒魚」が発刊されましたこと、重ねてお祝い申しあげます。装丁は、モミジの紅葉鮮やかな文学館の写真（奥山四郎撮影「紅葉映えるふくやま文学館」）がはめ込まれたブルーの美しい表紙で、皆様の文

学館への思いが象徴されているようです。

その誌面は、「文学探訪」、「現地文学館」、「文学講座」、「朗読の会」「虹」の活動、「鱈」「忌」と、二十年間の活動の履歴を描き出すとともに、友の会のたどった道程を浮かびあがらせます。そして、本誌の目玉は、「福山市および近接市町（備後圏及び岡山県西南部）ゆかりの文学者の紹介」であり、「福山ゆかりの文学者たちへの特別寄稿」です。皆様の地域の文学への愛着が感じられる。番のよみどころとなっています。

さて、友の会発足に当たり、亡き我が恩師・磯貝英夫（初代文学館館長）先生は、友の会が「大きく育って育っていくこと」が「文学館を育ててくれることにもなる」と述べています。本誌を拝読し、皆様の活動がその基盤となったことを実感いたします。会がますますのご発展をお祈り申し上げて、お祝いの言葉とさせていただきます。

庚申庵史跡庭園代表 松井 忍

初秋の候、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

ふくやま文学館友の会創立二十周年を迎えられた由、心からお慶び申し上げます。また、記念のご高著「山椒魚」を御惠贈賜りまして、感謝申し上げます。お届けいただいたいふんの目数を隔てて御礼を申しあげる失礼をご寛恕ください。

昨夕、確かに拝受いたしました。すぐにページを開き、二十周年の歴史を重ねられたご苦労と大きな実りを感じることができ、感激です。福山ゆかりの文学者の多彩な活動を勉強させていただきました。これだけの充実した内容の記念誌を、コロナ禍の不自由な環境の中でまとめられたこと、

感服の至りです。磯貝先生のお名前と怪妙で滋味深い語り口に、大正時代のあれこれ思い出して懐かしむこともできました。文学探訪はどれも魅力的でした。

貴会のご活動はこれからも、着実に続けていかれることと存じますが、何よりも「継続する」ことの大切さと大変さを思います。庚申庵史跡庭園も二〇二三年に開園二十周年を迎えます。貴会の存在を道しるべとして、何とか二十年の節目までたどり着きたいと思えます。

ふくやま文学館でお話しさせていただいたのは、ずいぶん遠いことのように感じます。その時以来、俳書の調査の時には、伊予の俳人だけでなく御手洗・福山・尾道など御地近隣の俳人についても気を付けてみています。樗堂が刺激を受けるに十分な文学的環境が整っていたことを実感します。その伝統が貴会によって引き継がれていることを、第二の故郷の一員として誇らしく思います。

これからも様々なご教示・ご指導をいただきたくお願い申し上げます。

コロナ禍によって庚申庵史跡庭園も現在臨時休園中です。度重なる臨時休園のため、計画していた事業も中止や変更を余儀なくされています。それでも、文化は不要不急のものではなく、必要不可欠なものであることを信じてささやかな活動を続けています。

御地も愛媛以上に厳しい状況にあることと拝察します。何よりもご健康を念じます。そして、機会があれば松山に再訪していただきますよう、お待ち申しあげております。

末筆ながら、会員の皆様にくれぐれもよろしくご伝声くださいますようお願い申し上げます。

文学の旅路 第一回

ふくやま文学館「友の会」会長 岡崎 忠

ふくやま文学館の「友の会」活動も二十年が経過しました。そこで「友の会だより」(二十二号)から、新企画として、全国各地の「文学者ゆかりの地」「文学者の歩んだ道」「文学作品に登場する舞台」をグループや家族で訪れ、文学作品をより身近な感覚で読み、更に深めることが出来るための特集を掲載することにしました。まずは、東北の青森県津軽地方「太宰治のゆかりの舞台」を掲載します。

太宰文学の背景「故郷・津軽」を探る。

太宰治(本名：津島修治)は、一九〇九(明治四二)年、青森県有数の大地主であり、資産家・政治家であった父津島源右衛門・母夕子の六男(兄五人・姉四人・弟一人の十一人きょうだい)として生まれた。使用人を含め三十数人の大所帯で母が病弱のため叔母や乳母に育てられ、早熟で異常なほど感受性の鋭い子どもとして成長した。十四歳で青森県の名門青森中学校に入学、故郷「津軽」を離れて青森市内に下宿、この頃から密かに作家を志し、芥川龍之介や菊池寛の作品を愛読した。

★太宰治の生まれ育った生家は、第二次世界大戦後、津島家が手放した後、旅館時代を経て、旧金木町が買い取り、一九九八年に現在の太宰治記念館「斜陽館」として開館されることになった。



斜陽館 作家・太宰治の生家で、明治40年6月に落成。太宰治記念館「斜陽館」として全国からファンが訪れている。

井伏鱒二と弟子：太宰治の親交

- ☆一九二七年 太宰が旧制・弘前高校(現弘前大学)に入学して間もなく数度にわたって井伏鱒二に「会って欲しい」と手紙を出すが発現できず。
- ☆一九三〇年 東京大学文学部仏文学科に入学、やっと敬慕していた井伏に会う。この年、鎌倉腰越で薬物心中未遂事件を起こし、長兄が井伏に弟の面倒を頼む。
- ☆一九三五年 太宰、東京大学の卒業試験で不合格になり、井伏に愚痴を述べ懐する。この後、太宰の失踪事件が起こり、井伏夫妻が奔走する。
- ☆一九三八年 太宰、最初の結婚に失敗、東京から井伏が滞在していた山梨県御坂峠の天下茶屋にやってくる。井伏夫妻の紹介で石原美知子と見合い、翌年井伏夫妻の媒酌で結婚する。



1939年1月8日太宰治の結婚式(井伏宅)。郎媒酌は井伏夫妻。前列右より井伏、新郎太宰治、新婦 美知子、井伏夫人

詩歌 あれこれ

- ☆一九三九年 太宰の「富嶽百景」の内容を巡って言い争う。
- ☆一九四一年 井伏徵用され、太宰は免除される。
- ☆一九四五年 太宰の疎開先(郷里金木)と井伏の疎開先(郷里加茂)間で手紙のやりとりをする。
- ☆一九四六年 上京後、太宰と井伏が会ったのは、三回だけであった。
- ☆一九四八年 太宰が自殺する。

俳句

八方に光を分かち石路の花
花杏すき間すきまに瀬戸の海
稲垣 知子

短歌

伯耆富士背に湧水を汲む五月
切り立ちし金山跡地山法師
藤井 淳子
そら豆の茹でて緑の甘さかな
春霞海にせり出す常夜灯
小川 つね子



詩

階段は椅子にもなると気がついて座れば
出石の山並見える場所
激つ湯にアールグレイを飲む朝夫とゆきし
雪山遙か
杉之原 壽美
普段は住人二人の我が家に夏来れば
燕やもりにトカゲ加わる
日石 輝子



魅せられて 文豪 安達 道子(一瀉千里)

いにしえを たずねて
ものがたりの底へと おりてゆく
物語の襖のむこうから
文豪たちの話し声が聞こえてくる
ゆるやかに
たおやかに
にぎやかに
そこから また
新しいものがたりの発端が生まれる
私はそれを見ていたい
目をそらさず
耳をすませて
じつと ずつと

『博士の愛した数式』(小川洋子著)を読んで

清川 英子

「博士」は数学専門の元大学教授。六四歳。四七歳の時交通事故にあい、脳にダメージを受け、記憶が不自由になる。しかし脳細胞は健全に働いている。記憶持続は八〇分だけ。この博士に、誰もがやっている当り前の日常を送らせてやりたいと義姉から頼まれ派遣されたのが家政婦の私。十歳の息子を抱えている。子供が一人家に居るのは良くないと博士に言われ、学校帰りに博士の家へ出入りするようになる。頭のとつぺんがルート記号のように平らだったのでルートと呼ばれる。「君の靴のサイズはいくつかね」これが博士の初対面のひととの挨拶。言葉の代わりに数字を持ち出し会話が始まる。阪神の江夏豊投手が大好きで、その背番号28は「完全数」。完全数は連続した自然数の和で表せる。

さわめつきは、オイラーの公式である。

《e^{πi+1} = 0》

素人目にも、簡潔で美しいと思う。まさに神様の計らいと思われる。しかもその計らいをきちんと察知したのがレオンハルト・オイラー。もうこうなると、数学という宇宙の深遠さと神秘さを感じずにはいられない。博士はこういう世界に魅了されているのである。また子供に向けた愛情は永遠の真実であった。ルートもその愛情に精一杯答えた。

博士のことを「義弟」と呼ぶ母屋の婦人は、博士が二九歳の時書き上げた数学の論文の表紙に「永遠に愛するNへ捧ぐ、あなたが忘れてならない者より」と記された人である。また博士が事故にあった時、同乗して新聞記事にも「義姉五五歳」とある。ここまでの二人の間に何があったのかと、秘められた思いを想像してみる。

ともあれ、数字と愛を交わし、血のつながりは無くても、自分を心から思ってくれる、そして自分も思う人たちに囲まれて過ごした博士は、たと

え記憶が薄れていつても幸せだったと思う。

題名を見、また巻木の参考文献に「藤原正彦」の名をみつけて、すぐこの博士が藤原正彦さんとオーバーラップした。「流れる星は生きている」の藤原で、「アラスカ物語」の新田次郎夫妻の二男で、数学者であり、作家である。氏のデビュー作『若き数学者のアメリカ』以来の愛読者である私は、氏の作品を通じて「フェルマー予想」とか「オイラーの公式」という言葉は知っていた。それがこの小川洋子さんの作品で、かくも鮮やかに解説されているのにびっくりした。こんな文学作品は初めてである。

王選手は1、長嶋選手は3、今活躍中の大谷翔平選手は17、みんな素数である。考えただけでも楽しい。

たら、ればはやめにして今を生きなんよ
野辺のコスモスそよぎ揺れをり 英子

「友の会」の活動計画

二〇二二年四月、二〇二三年三月

一、「友の会だより(第二号)」発行

二、友の会発足二十周年記念研修旅行
内容 「城崎(志賀直哉)・出石(木山捷平)の文学探訪」

日時 二〇二二年(辛丑)年五月二二日(火)
場所 「城崎町文芸館」の見学・志賀直哉の小説「城崎にて」の舞台、木山捷平の郷愁の地・但馬の小京都「出石」の散策

未曾有と言われる「感染症新型コロナウイルス」の世界的大流行のため当初計画していた

「横浜・鎌倉の文学探訪」が「福岡・佐賀・長崎の文学探訪」に、松尾芭蕉の故郷「伊賀上野」と二転三転し、最終的に「城崎・出石の文学探訪」になり会員の皆様に大変ご迷惑をおかけしました。

三、「鱒三忌」(井伏鱒二没後二九年)

日時 二〇二二年七月九日(土)
内容 講演「井伏家と栗根文化圏」
講師 世良正文(広島大学名誉教授)

朗読の会「虹」による井伏鱒二著「お濠」に関する話の朗読
場所 ふくやま文学館研修室

四、文学館主催「朗読会」

文学館の企画展に併せて、福原麟太郎(英文学者・随筆家)について学びます。
日時 二〇二二年十一月六日(日)

内容 朗読の会「虹」による福原麟太郎の「随筆の楽しみ」の朗読
場所 ふくやま文学館研修室

五、第八回「文学講演会」

ふくやま文学館に親しんで頂くため、近隣在住の作家及び講師を招き講演を聞く研修会です。
日時 二〇二二年十二月十八日(日)

演題 「水野勝成を巡る人々」
講師 藤井登美子(小説家)

六、第八回「文学講座」

日時 二〇二三年一月八日(土)
講師 岩崎文人(ふくやま文学館館長)

演題 「二人のベトナム報道特派員―日野啓三と開高健」
場所 ふくやま文学館研修室

編集を終えて

文学館友の会二十周年記念誌「山椒魚」発刊に際しましては皆様に大変お世話になりました。ご協力ありがとうございました。文学館友の会だよりは三年振りの発行となります。二十周年後の新企画として「文学の旅路」を掲載いたします。今後とも皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。(岡田)